moc OSAKA 大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

2007.7 No.82

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

展示のおしらせ
開催中〜9月30日（日）

特別展
美の求道者・安宅英一の眼—安宅コレクション

常設展
東洋陶磁の展開
（李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁）

休館日：月曜日(7/16、9/17、24を除く)、
7/17、9/18、25
開館時間：午前9時30分〜午後5時、
金曜日は午後7時まで
（入館は閉館の30分前まで）

風塵往来 10

ホラー小説、ホラー映画の類いは、苦手である。ひたすら、怖いのである。とくに人間のどろどろした怨念が籠っているものは、ごめん蒙りたい。

それに引きかえ、幻想文学は好みに合う。幻想文学は、怪異小説とよく混同され、境界線も定かでないが、私にはその差は明らかである。怖いか、怖くないかで判断する。幻想文学は欧米では古い歴史を持ち、中国でも明代初頭の『剪燈新話』あたりが嚆矢であろう。清代では『聊斎志異』、文学としてはこの方がはるかに上質である。ここには狐狸幽鬼がしきりに現われるが、不思議なことに彼らは心や容姿が美しく、読後に甘美なせつなさを覚えるものが多い。牡丹の花の精が、人間に恋をし、紆余曲折の末、最後は冥界で添い遂げる話など、思わず身につまされる。

日本では鎌倉時代の明恵上人『夢之記』が世界最古の夢の記録として知られているが、やはり古くは、上田秋成の『雨月物語』を挙げるべきだろう。それは明治大正の文学に大きな影響を与え、代表は泉鏡花であり、頂点とされる。しかしその前後に活躍した夏目漱石や内田百閒にも、忘れ難い作品がある。前者の「夢十夜」、後者の「冥土」などがそれで、とりわけ「夢十夜」は、小品ながら漱石作品の中でも注目を向けるべきものであろう。私の好きなのは、第一夜である。漱石の天分資質が、厭おうなしに納得させられる。

「…腕組をして枕元に座っていると、仰向けに寝た女が、静かな声でもう死にますという」に始まる夢幻のような物語が展開する。「百年、私の墓の傍らに座って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」。待っても待っても、女は現れず、欺されたのかと思いだす。すると石の下から青い茎が伸び、見る間に長くなって胸のあたりで留る。一輪の蕾がふっくらと花びらを開き、「真白な百合が鼻の先で骨に徹えるほど匂った」。「首を前に出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻をした」。そして百合から顔を離す拍子に思わず遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬き、「百年はもう来ていたんだな」と気がついた、というのである。硬質的な表現ながら、香気高く余情あふれる。

オランダの画家P・モンドリアンは、新造形主義を提唱し、黒の水平線・垂直線と三原色で構成された単純無比の画境を打ち立てた。しかし若いころには、象徴主義、神秘主義の色濃いデッサンを残している。その花の物言うような不思議な姿が、漱石の百合の花に重なり合い、春の朧夜、一時の陶酔に引きこまれてしまうのである。

（館長　伊藤郁太郎）

展示室から

特別展「美の求道者・安宅英一の眼—安宅コレクション」

今回は学術的な解説とともに、伊藤郁太郎館長による作品に関するエピソードを、展示会場や図録などで紹介しております。ここでは、その一端をひろってみました。

青花蜀葵文碗（「大明成化年製」銘）（表紙）

明の成化年間に作られた青花の碗は、パレス・ボウルと呼ばれ、世界に数十点しか残されていない。元時代に生まれ、明時代に発達した青花磁器がその頂点を迎え、洗練さの極致といわれる境地に達するのが、この成化年間であった。確かに白磁の釉色も純白ではなく、ごくわずかにクリーム色を帯びてやわらかい。青花の色も永楽や宣徳に比べると、淡くなって、いかにもおだやかになる。文様もそれにつれて、落着いた上品さを漂わせる。安宅氏がこの成化の青花に目標を置いたのは、当然のこと。すぐれた作品を三点も入手できたことは、奇跡に近かった。名だたる美術館でも、一点も所蔵していないところが多いからである。その中でも、最高の一つと思われるものが、この碗である。英国のブルエット社から、昭和48年の購入。

写真上
青磁鉄地象嵌詩銘瓶
高麗時代・12世紀後半　h:30.0cm　李秉昌氏寄贈

写真下
色絵相撲人形　有田（柿右衛門様式）
江戸時代・1680年代頃　h:30.6cm、31.3cm

常設展「東洋陶磁の展開」
李秉昌コレクション韓国陶磁　青磁鉄地象嵌詩銘瓶

やきものに文字が書いてあると、誰しもがその意味を知りたいと思うことでしょう。この瓶にも鉄絵具を塗りつめて黒色とした上に、白象嵌（ぞうがん）により、「酒為温無毒　茶因冷不香（酒は温めてこそ毒とならず　茶は冷めれば香らない）」「此酒不可不飲　佳人才子剎逢（この酒を飲まずにいられようか　佳人と才子のつかの間の逢瀬に）」という詩があらわされています。その心は、恋よ恋、熱く燃えあがらん、といったところでしょうか。実際の作品も今日のお銚子と同じく上げ底となっており、燗をしたようです。燃えさかる恋のように、この瓶にも燗がききすぎて熱くなりすぎた昔があるのでしょうか。（M.K.）

日本陶磁　色絵相撲人形（二組）

本作品は、2月から3月にかけ茨城県立歴史館で開催された特別展「すもう今昔ー日の本を踏みかたむるは相撲かなー」に出品されました。同展の図録を見ると、相撲の歴史が『古事記』の時代から紹介されており、相撲の国技たる所以が改めて得心できます。この作品は延宝年間（1673-80）頃のものですが、当時京都や江戸では辻相撲や勧進相撲が大変流行していました。この種の人形はヨーロッパ向けにも輸出されたようで、類例が英国貴族の大邸宅“バーリー・ハウス（Burghley House）”に伝わり、1688年のその家財目録には“2 China Boyes Wrestling”と記載されています。茨城巡業を終え、地元大阪場所となった我らが相撲人形は、心なしかにこやかに見えます。（H.K.）

休館のおしらせ：平成19年10月1日より平成20年3月31日まで、地下電気機械室工事のため、半年間休館をいたします。

青花蜀葵文碗（「大明成化年製」銘）
景徳鎮窯　明時代・成化（1465-1487）
径14.6cm　Acc.No.10786

編集後記

大阪天満宮は当館から歩いて20分足らずの所にあり、老松町通は天満宮の参道ともなっています。今年も天神祭が7月24、25日に行われ、船渡御の前に行われる陸渡御は、この老松町通から御堂筋に出て、市役所の北側を経て、当館の正面玄関前を通っていきます。公会堂と当館の間の地点では、いつもパフォーマンスが行われ、隠れた天神祭のスポットとしてお勧めのところです。24日に行われる祭の初めの鉾流神事もすぐ横の鉾流橋が舞台となり、ちょうど当館の開館時間に神事が行われています。当館においでの行き帰りに天神祭もお楽しみください。（S.S.）

ボランティアの窓

ある美術館に陶芸の展覧会を観に行った時の事です。一つ一つの作品は素晴らしく、楽しんでおりましたが、ふと気になり始めたのです、ガラスケースのくもりが…。その後は、なぜかそのくもりが気になり、どうも作品に集中する事ができなくなったのです。東洋陶磁美術館の美しいガラスケースになれた眼にはさまざまな弊害もあるようです。（C.O.）

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信　通巻第82号
2007年7月1日発行　No.23-2（年4回）

編集・発行：大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン：清鳩滋+studioTWEN　印刷：岡村印刷工業株式会社

第63回講演会要旨

「将軍家への献上 鍋島焼について」

佐賀県立九州陶磁文化館館長　大橋康二氏

Fig.1
色絵山水竹鳥文輪花大皿
景徳鎮窯　1620-1640年代　d:34.1cm
（財）鍋島報效会蔵

Fig.2
色絵山水竹鳥文輪花大皿
有田窯　1640-1650年代　d:34.5cm
（財）鍋島報效会蔵

Fig.3
色絵椿文輪花大皿
1650年代　d:39.2cm　（財）鍋島報效会蔵

今回の特別展「将軍家への献上ー鍋島」は画期的な展覧会になりました。まず、何が画期的なのかを企画者として、お話いたします。

鍋島は、江戸時代の絶対権力者である徳川将軍家への献上を主目的として、肥前鍋島藩が採算を度外視して作らせました。献上品という性質のため一般流通はされず、主に江戸で将軍や他の大名家への献上・贈答が展開されたものです。

1610年代頃に、文禄・慶長の役の後に移住させられた陶工によって、鍋島藩の有田で日本初の磁器である伊万里焼が誕生します。当時、中国からの輸入品で、特に景徳鎮で作られた磁器が品質的に優れ珍重されたので、初期の伊万里焼はこの景徳鎮の磁器を手本に作り始めました。ただ中国磁器がまだ輸入されていたため、その輸入量を補う形での流通でした。この有田民窯から鍋島焼が生まれたのです。従来鍋島の誕生は、藩主が磁器生産に力をいれたために、優秀な陶工が輩出して鍋島焼が生まれ、それを藩主が天皇や将軍への献上や大名・公家の贈答に使ったと考えられていましたが、献上・贈答のために作られたという鍋島の性質が、その品質や文様の区別に大きく関与するとは考えなかったのです。

1600年の関が原の戦では、鍋島初代藩主勝茂は敗退した西軍に組みしましたが、鍋島藩は存続を許され、そのために時の権力者家康との関係修復は藩にとって最大の課題であり、特に献上品には慎重でした。初代将軍家康から三代家光の間に幕藩体制が整えられ、幕府は各大名家に参勤交代や例年献上によって多額の費用を使わせました。例年献上はその内容に至るまで幕府の許可のもとで行い、できなければお家断絶という厳しいものでした。将軍への献上品は中国の文物が最適とされ、鍋島勝茂は長崎に来航する中国船から絹や陶磁器を調達して、献上を始めました。

1644年の明清交代時の内乱は、伊万里焼に大きな影響を与えます。内乱によって中国磁器の輸入がなくなったため、一気に伊万里焼が日本国内の磁器市場を独占し、さらにそれまで中国磁器を輸入していた東南アジアやヨーロッパの国々が、伊万里焼の輸入を始めます。こうして肥前の伊万里焼は誕生後わずか三十年にして、海外輸出を始めました。この機に朝鮮半島の技術から中国の技術へと大きな革新を果たし、その代表が色絵の技術でした。この中国の色絵技術の導入によって、高級品として上流階級が珍重した色絵磁器が創始されました。鍋島の誕生もその内乱の結果といえます。将軍家献上に用いる中国磁器が入手できなくなった鍋島藩主勝茂は色絵磁器を創始した有田に、藩主所有の景徳鎮の磁器（Fig.1）を見本に、似たものができるかと打診をします。そして有田の陶工が作り上げたもの（Fig.2）が、見本と同じ水準に達しているのを見て、藩主勝茂は鍋島の開発を決心したと思われます。1651年の幕府の記録に、伊万里焼を三代将軍家光の内覧に供したことが記載されています。これは鍋島を将軍家への献上品とするために、将軍が亡くなる前日という非常時に内覧が行われ、認可された記録と考えるべきでしょう。このように鍋島は誕生し、例年献上が展開されていきます。

この頃オランダ東インド会社が中国磁器輸出の再開に見切りをつけ、1659年に伊万里焼の大量輸出に踏み切ります。生産規模の増大に鍋島藩では窯業界の再編を推し進め、1660年代に重要な色絵の技術者達を一箇所に集め、有田町の中に赤絵町を作ります。また技術の秘密保持のために、藩窯を有田の岩谷川内から険しい山に囲まれた伊万里の大川内山に移転し、これ以降幕末までの約二百年間はこの大川内山藩窯で鍋島の生産が行われました。従来、この大川内山藩窯からを鍋島として紹介されますが、誕生期の有田時代から解き明かしたのは本展が初めてです。

やがて五代将軍綱吉の時代に、鍋島は最盛期をむかえます。綱吉は歴代将軍の中でも最も強い将軍権力を行使し、その政権の後半期には大名屋敷への「御成（おなり）」を展開します。その中で鍋島に対して将軍家からより優れた品の要求があり、その結果、鍋島の最盛期が一気に訪れます。ただ、この最盛期も八代将軍吉宗が、幕府の財政を立て直すために出した倹約令のため、わずか三十年弱で終わってしまいます。この倹約令は非常に厳しく、鍋島も色数の多いものは華美であるといわれ、三色を使った色鍋島はここで一気に消えてしまいました。

その後、十代将軍家治は自分好みの十二通りの品を注文し、以後の将軍家献上品の中に家治好みの十二通りから二、三品は含めるように命令が下されました。これ以降幕末までの数十年間の将軍献上品には、この十二通りの中から、同じような図柄が作られていきます。例年献上の内容は将軍の代替りには、必ず幕府に確認をとり、藩の意向で献上をやめることは不可能でした。江戸末期に鍋島藩は長崎の警備にあたり、外国船の往来によって緊迫した状況下での警備は膨大な費用がかかりました。このため鍋島藩は例年献上の免除を陳情し、ようやく幕末に五年間の免除が許されます。その後、明治時代に廃藩置県で鍋島藩が解体されると同時に、この鍋島藩窯も終わり鍋島の歴史も閉ざされます。

ここからは各時代の鍋島の特徴について話しします。初期の有田時代には濃厚な色が使われ、この濃厚な色合いが最盛期の鍋島と違うことから、昔は鍋島と考えられずに鍋島藩の支藩である小城藩の松ヶ谷窯と考えられました。しかし、1650年代の有田民窯では、青手（あおで）と呼ばれる濃厚な色のものを作っており、その青手から濃厚な色彩のものが作られたと考えられます。1640年代の有田民窯には色絵の技術に二通りあり、輪郭線を赤で引いて明るい赤、緑、黄色で塗った祥瑞手、南京手と呼ばれるものと、輪郭線を黒で引き濃厚な色を五色くらい使った五彩手という技法でした。祥瑞手は鍋島によって採用され、有田からこの装飾技法は消えます。五彩手は、有田民窯に残って段々色が明るくなり柿右衛門様式に変化していきます。また、鍋島も祥瑞手の技法は初期鍋島までは行いますが、最盛期になると赤の輪郭線は消えて、基本的に染付で輪郭線を引いたものだけになります。

この時代に藩主が開発に深く関わったとみられる鍋島勝茂伝来の二枚の大皿があり、今回初出品されています。この二枚を比べると、見込みの椿の表現が異なり、こちらは（Fig.3）焼き上げた素地の上に黒線で輪郭を引き、緑や黄色、赤などを塗って、椿を表現しており、それに対してこちらは（Fig.4）、最初の本焼段階で染付の輪郭線で模様が描かれています。この二枚の大皿は、おそらく鍋島藩主が方針を決めるために作らせたもので、その方針が決まると将軍が使う器は似たものが民間にあってはいけないので、鍋島が採用した技術は有田民窯から消えました。

鍋島の特徴は基本的に皿が主であり碗はなく、これが有田民窯との大きな違いです。また、将軍家に相応しい完璧さも鍋島の重要な特徴です。鍋島は装飾を高台内に入れず、これも有田民窯との違いの一つです。有田民窯の製品は高台内に薄いものを作るため、針支えをして底がたれるのを防ぎますが、鍋島は針支えの跡も傷と考え、そうしたものを使わずに完璧なものを作り上げました。有田時代は大きなものは完璧に焼くのが難しいためか、ほとんど小さい皿が作られています。三代将軍家光の次代の家綱は十一歳で将軍を継ぎ、この家綱時代は将軍が病弱だったこともあって家光時代とは異なり、取り潰された大名はほとんどなく平穏な時代でした。そうした時代背景や、将軍が子供という理由もあってか、小皿中心の献上が展開された可能性が高いのです。

大川内藩窯の初期の品を初期鍋島と呼び、その中でも最初の頃には、まだ有田時代と同じように高台が低く、高台に文様のないものも見られますが、段々と高台が高くなり文様が入り始めます。初期鍋島の後半の1680年代ぐらいから櫛高台が現れ始め、最初のものは櫛の長さが短く、高台の畳付近くにぐるッと引かれた染付の線と、櫛との間に隙間が多いのが特徴の一つですが、その隙間が段々狭くなっていきます。また、裏文様も櫛高台と七宝結びの組み合わせは最盛期になってから見られ、初期の頃には櫛高台であっても裏文様が違うのが普通でした。

前述の五代将軍綱吉が行った「御成」は側用人の屋敷から始まり、1694年頃からは老中の屋敷、更に徳川御三家、そして加賀前田家へと拡大しました。この「御成」はかなり前から幕府の予告があり、予告を受けた家は屋敷の新築などをして将軍をお迎えしました。加賀前田家の記録には三日間で三万人の食事を準備したとあり、すさまじいものであったことがわかります。この「御成」の場でそれに相応しい器として将軍家から優れた品の注文があったと考えられます。1693年に二代藩主光茂が大川内藩窯に、有田民窯の優秀な陶工を集めてでも、より良いものを作るようにと命令した「手頭」が残っています。将軍の注文に早急に対応すべき状況下で、この命令書によって優秀な陶工が集められ、最盛期の鍋島が一気に誕生したのです。

最盛期の特徴的なものとして三足大皿があり、この三足大皿は有田民窯にもみられます。ただ窯詰めの仕方が大きく異なり、有田民窯では皿のようなものを下に置き、高台が宙に浮いた状態で窯に詰めて焼きますが、鍋島では細い支えを三十数本並べた特別な方法で焼いています。しかし、こうした手の混んだ方法は、最盛期で消えていきます。また、裏文様と高台の装飾をみていきますと、将軍家への例年献上の皿の裏には牡丹唐草文や牡丹折枝文が描かれていますが、鍋島の裏文様としてよく知られる七宝結び文は、将軍家献上品ではなく、他の大名への贈答に使われたことがわかってきました。献上品の高台の文様は基本的に七寸以下は櫛高台が主のようですが、ただ一尺の大皿は特別なものでしたので、高台の文様も変えて七宝繋ぎの模様が描かれています。

この最盛期も八代将軍吉宗の倹約令で終焉をむかえます。将軍の食器の数を減らす指示はないのですが、1726年に色数の多いものは華美であると、江戸の留守居役に老中から通達があり、そのためこれ以降の将軍家献上は青磁も作られますが、基本的には染付になって行きます。ただ、その後全く色絵は消えたのではなく、赤や緑などを使った一、二色で装飾したものは、許されたようですが、非常に少なく、これらは裏文様を見ても将軍家献上品ではないので、例年献上以外のところで使われたようです。その一方で同じ1726年に吉宗は私的なものだから、有田民窯でも良いと酒器を注文してきます。鍋島藩では将軍が使うものなのでやはり鍋島藩窯でなくてはと、作らせたのがこの仙盞瓶（Fig.5）と考えられています。この形のものは鍋島ではほとんどなく、恐らく特徴からも吉宗の時代と考えられるものはこれしかありません。

もう一つ、吉宗にまつわる品で、今回の展覧会で初めて紹介するものがあります。吉宗は紀州藩主時代から、戦時や火事場などでの喉の渇きを癒すものとして梅干の備蓄を命令していました。肥前は梅干の産地でしたので、毎年の夏頃には梅干を献上していましたが、梅干を重視した吉宗のために鍋島で大壺を作り、これに七升の梅干を収めて将軍家へ献上しました。鍋島にはこの吉宗時代より古い壺はまったくなく、この梅干を入れたと考えられる高さ47cmくらいの壺しかありません。特徴は有田の壺と違って裏の部分に布の目跡があります。将軍家献上品なので、規格が非常に厳しく正確に作るために、型を使った時の布目跡です。その後、この鍋島大壺は江戸後期まで続きますが、形が変り、布目跡も見られなくなるなど、作り方も時代によって変化したと考えられます。

江戸後期になると、江戸幕府の弱体化や陶工の技術の低下のためか、鍋島は少しずつ質が落ち生産体制も崩れ始めてきます。櫛高台の表現も、初期は輪郭を全部染付の線で引き内側をダミ筆で塗っていたのが、江戸後期になると少し太めの筆で一本線を引くだけになっていきます。

この江戸後期には、新しく京都の朝廷・公家への献上・贈答があります。鍋島藩は、藩主直正の義兄にあたる公家の久世三位通熙中納言を仲介役として朝廷との繋がりを強めていきました。1853年にこの久世三位から注文されてきた図案には、シダを裏文様として描かれています。将軍への献上品などに今まで使っていた裏文様とは別に、天皇や公家向けの品にシダを用いようと決めたのでしょう。このように鍋島は当時の政治の中枢にいる人達のために作られたものですので、政治の動きを敏感に反映していることがよくわかります。また鍋島の歴史が政治の推移を裏付ける物証ともなる性格のやきものだともいえるのです。

この鍋島の終焉期に、最後に記録に残しておこうとして作られたと思われる藩窯の絵を描いた大皿（Fig.6）が残されています。この大皿を見ると、険しい岩山に囲まれた小さな窯場に、石垣と塀に囲まれて役所と細工場があり、その隣の登窯で焼いていました。この登窯は130mほどの巨大な窯で、約三十三の焼成室が連なり、その中の中心の一番火の具合がよい二部屋に藩窯の製品が窯詰されました。登窯は長い窯ほど火の具合のよい場所ができるため、大きな窯を作って一番よい場所を占有し、そのまわりはお手伝い窯と称して民窯の陶工に提供するとともに焼成作業を全て行わせました。そのようにして、年間に約五千個と定めて生産され、そのうちの約二千個が将軍家へ例年献上され、それ以外の三千個が随時の献上や他の大名などへの贈答用にあてるということを延々と二百年近く行ったのです。

明治に藩窯が解散した後、鍋島藩の庇護がなくなり、一時陶工達が離散するような状態に追い込まれ衰微したこともありましたが、また次第に復活して、大川内は歴史的な雰囲気のある窯場として、一帯が国の史跡に指定され、その活用の方策なども考えられています。

以上、鍋島の誕生から、幕末までの約二百年間の歴史をお話しさせていただきました。

※挿図の全ては『将軍家への献上　鍋島ー日本磁器の最高峰ー』より転載したものです。

（文責：友の会事務局）

Fig.4
色絵椿文輪花大皿
1650年代　d:38.5cm　（財）鍋島報效会蔵

Fig.5
色絵牡丹唐草文水注
1700ー1730年代　h:31.0cm
静嘉堂文庫美術館蔵

Fig.6
染付大川内藩窯図大皿
1830-1870年代　d:50.0cm
佐賀県立博物館蔵

プロフィール

大橋康二氏
1948年横浜生まれ、青山学院大学文学研究科史学専攻博士課程中退。佐賀県教育庁文化財課を経て、現在佐賀県立九州陶磁文化館の館長として勤務。九州陶磁の研究者として第一線で活躍。著書に、「古伊万里の文様」理工学社、「世界をリードした磁器窯　肥前窯」新泉社、「海を渡った陶磁器」吉川弘文館など